アマルティア・センの『国富論』解釈の批判的検討*

Examining Amartya Sen's Interpretation on *Wealth of Nations*

菅　　隆　彦
Takahiko Kan

1．序論

本論文は，アマルティア・センの『国富論』解釈を批判的に検討する。アダム・スミス著『国富論』[1]（Smith, 1982a）は経済学の著名な古典である。同書は国の富を国民が生きるための財と定義し，国の富を最大化するための方法について論じた[2]。スミスにとっての経済学は金銭的利益追求のための学問ではなく，人間の生命を保障しより良い生き方を実現するための学問であった。このスミスの経済学を，センは高く評価し，自身が提唱する「潜在能力アプローチ」に取り入れた。潜在能力アプローチは人間の生き方の質を測るための有力な方法の一つである。加えてセンは他のスミスの著作である『道徳感情論』（Smith, 1982b）を高く評価した。顕著な業績を持つセンの高評価により，スミスの二つの著作の現代的意義が再認識されてきた。

しかし，センによるスミスの著作の解釈が学説史研究の観点からして不合理であることが，一部の解釈について指摘されてきた。例えば，Forman-Barzilai（2010, pp. 166-192），Fleischacker（2011, pp. 26-31），Rasmussen（2014, p. 50），Golemboski（2018）は，『道徳感情論』における「中立的な観察者」概念に関して，センの解釈が不合理であるとした。ただし，これらの先行研究においては，センの『道徳感情論』解釈が一部の解釈についてしか検討されていないし，『国富論』解釈について十分に検討されていない。センの『道徳感情論』解釈については，菅（2023）が既に全体的に批判的検討をした。これに続き本論文ではセンの『国富論』解釈について批判的検討を行う。前者のこれまでの研究を活かして，センの『国富論』解釈と『道徳感情論』解釈を併せて論じる。

本論文は以下のように構成される。第 2 節ではセンの『国富論』解釈を分類して把握する。第 3 節ではセンの解釈を批判的に検討する。第 4 節ではセンの『国富論』解釈と『道徳感情論』解釈を併せて論じる。第 5 節では前節までの議論を総括しさらなる研究の余地に言及する。

2．センの『国富論』解釈

センは数多くの著作で『国富論』へ言及している。同書を単に紹介するような簡単な言及もあれば，同書の内容に深く踏み込んだ詳細な言及もある。後者の詳細な言及を読み解くことで，本論文はセンの『国富論』解釈を把握する。センの解釈は大きく二つに分類することができる。

分類１：自己利益追求以外の動機

スミスが自己利益追求（利己主義）の権化だという通俗的な解釈は誤りであると，センは主張する（セン，2002a）[3]。通俗的な解釈においては，スミスは自己利益追求のみを重要な動機と見做していたとされる。通俗的な解釈の代表的な提唱者として，Sen（2010）はジョージ・スティグラーを挙げる。通俗的な解釈を採用するのはスティグラーだけではなく，多くの合理的選択理論を仮定する研究者も同様に採用する。合理的選択理論においては，合理性とは自己利益追求を意味する（Sen, 2011, p. 263）。

通俗的な解釈の主な拠り所となるのは，『国富論』におけるパン屋・肉屋・酒屋の一文（WN：I. ii.2）である（セン，2000b, pp. 311-312）。この一文は多くの経済学者に繰り返し引用されてきた。売買取引の動機を説明する際に，スミスは利他的な動機ではなく自己利益追求の動機を採用した。確かに，売買取引が成立するのは一般に双方に自己利益が得られるからであって，他者を利するためではない。しかしそれはスミスにとって売買取引を説明するためには自己利益追求の動機のみで十分であったからにすぎない。スミスは『国富論』において他の動機の重要性について論じていた。スミスによれば，自己利益追求が主な動機となる市場だけでなく，他の動機が必要とされる様々な制度が必要である（Sen, 2011, p. 266）。スミスは自己利益追求のみを奨励していたわけではない。むしろスミスは自己利益追求が社会的損失を生む可能性を指摘していた（セン，2000b, p. 141）。スミスは自己利益追求のための浪費や投機の悪影響を懸念していた。

分類２：潜在能力アプローチとの整合性

センは，自身が提唱する「潜在能力アプローチ」と，『国富論』との整合性を，多くの著作で指摘する。潜在能力アプローチでは，財の集合ではなく，複数の「機能」を包含する集合に焦点が当てられ，その機能の集合が潜在能力と定義される[4]。各人がどんな財を持っているかではなく，各人が財を使って何をできるかが，同アプローチにおける指標となる。二人の人間が同じ財を持っていたとしても，二人のできること（機能）には差がある。例えば，一人が身体的に重度の障害を有し，もう一人が有さないとすれば，二人の機能には大きな差がある。センによれば，潜在能力の平等こそが，社会において成し遂げられるべき目標である。

センが問題にする貧困とは，当然ながら，潜在能力アプローチで測った貧困である。そのような貧困を定義する際には，貧困の基準が各社会で異なることが前提となる。つまり貧困を相対的に捉えることが必要となる。この捉え方はスミスによって200年以上も前に採用されていた。スミスは，生存に必要な財の集合と区別して，「必需品」という財の集合を定義した（WN：V.ii.k.3）。センの見方によれば，必需品は財の集合であって，必需品を有していれば単に生存できるだけでなく人間として見苦しくないような生活を実現できる。見苦しさの基準は社会によって異なるし，時代によっても異なるから，各社会で必需品の定義は異なる。

ただし，貧困の解決の仕方については，センはスミスと異なる意見を持つ。センによれば，スミスの貧困解決策は市場を介したものに限定される（セン，2017b, p. 259）。スミスによれば，純然

たる直接的な援助ではなく，市場を上手く機能させることによって実現される間接的な援助が望ましい。しかし市場は常に上手く機能するわけではない。例えば不況時の飢饉においては市場を通じて食料を供給することは難しい。市場だけではなく直接的援助などの他の手段を活用して，貧困を解決する必要がある。

センは教育についてスミスの主張を援用する（セン，2000b，pp. 339-340）。スミスは生産可能性の分析において教育の役割を重視した。センに言わせればスミスは「教育派」である。スミスによれば，個人間で才能の生まれながらの差は小さく，教育によって差は大きくなる。スミスは生産的な能力と生き方を教育に関連付けていたのであり，改善可能性を想定していた。このことは，スミスが潜在能力の改善可能性について確信を持っていたことと整合する。スミスは教育の場である学校については，市場に委ねるべきではないとした（セン，2016a，p. 175）。スミスにとって教育は重要であり，だからこそ市場に左右されるべきではなかった。

3．センの解釈の批判的検討

前節ではセンによる『国富論』解釈を二つに分類し，それぞれについて説明した。本節ではセンによる解釈を批判的に検討する。

分類 1：自己利益追求以外の動機

スミスが自己利益追求（利己主義）の権化だという通俗的な解釈が誤りであるとする，センの主張は，正しい。通俗的な解釈においては，『国富論』におけるスミスの主張の断片が都合良く利用されている。センが指摘するように，売買取引を説明するためには自己利益追求の動機のみでスミスにとって十分であったが，他の事柄を説明する際には自己利益追求以外の動機の重要性にスミスは言及しているし，自己利益追求が社会的損失を生む可能性にも言及している。センは，論敵の主張の論拠である『国富論』を自身の論拠として，論敵の主張を批判している。センの批判は内在的なものであり，見事な批判であると言えよう。

分類 2：潜在能力アプローチとの整合性

センが主張する通り，潜在能力アプローチと『国富論』の整合性は高い。センは貧困の基準が各社会で異なることを前提とし，貧困を相対的に捉える。この捉え方はスミスに確かに採用されていた。人間として見苦しくないような生活は社会によって異なるし，時代によっても異なる。よって各社会で必需品の定義は異なるのであり，貧困も各社会で相対的に捉えるべきということになる。

しかし，スミスの貧困解決策は市場を介したものに限定されるという，センの批判は，その妥当性について議論の余地がある。確かに，『国富論』を読む限りにおいては，純然たる直接的な援助の強い必要性は論じられていない。しかし，同書においてスミスは市場経済の活用を主に論じたのであり，市場を活用した貧困の解決に重きが置かれるのは当然であろう。センの潜在能力アプロー

チと『国富論』は，そもそも，議論の前提が完全には一致していない。スミスの貧困解決策は市場を介したものに限定されるという，センの批判は，その妥当性に疑問が残る。

またセンが主張する通りスミスは教育の役割を重視した。スミスによれば，個人間で才能の生まれながらの差は小さく，教育によって差は大きくなる。しかしそのことを潜在能力アプローチに関連付けるのはいささか強引であろう。人間の能力が教育によって高まるということは極めて一般的な主張であって，このことから潜在能力アプローチに関して何かが言えるわけではない。分類１で見た通り，センの論敵は『国富論』の断片を都合良く利用しているが，センもまたそのような利用の仕方に陥っている可能性がある。

４.『道徳感情論』解釈と『国富論』解釈

前節まではセンの『国富論』解釈について論じてきた。本節ではセンの『国富論』解釈と『道徳感情論』解釈を併せて論じる。なお，センの『道徳感情論』解釈については，菅（2023）において詳細に論じた。

センの二つの解釈から共通してわかるのは，「自らの思想的源流をアダム・スミスに求める」（セン，2014，p.360，監訳者の解説文）センの傾向である。センの著作にはスミスの引用が随所に見られ，それらにおいてセンはスミスの主張を援用している。センのスミス解釈はけっして生半可なものではない。学説史研究においてはスミスの主張を理解するにあたって単一の著作ではなく全著作を一体的に理解することが求められているが，センもそのような理解を試みている。特にセンは『国富論』と『道徳感情論』を一体的に理解している。例えば，自己利益追求以外の動機について論じる際に，両書を論拠として，スミスが自己利益追求以外の動機も重要視していたことを示す。

しかし，センの解釈には我田引水の傾向があることも確かである。『国富論』解釈については第３節の分類２で見た通りである。『道徳感情論』解釈についても，菅（2023）の第４節で論じた通り，センが時に都合良く同書を解釈していることがわかる。両書についてのセンの解釈を比べるとすれば，『道徳感情論』解釈の方が我田引水の傾向は大きい。我田引水の傾向が大きい無理のある解釈であれば，センの主張との整合性について疑問が生じる。センの主張には『道徳感情論』よりも『国富論』の方がより整合すると言える。

５．結論

本論文は先行研究を発展させてセンの『国富論』解釈を批判的に検討した。センの解釈は，自己利益追求以外の動機と，潜在能力アプローチとの整合性との，大きく二つに分類できる。前者の分類の解釈は妥当であるが，後者の分類の解釈についてはその妥当性について議論の余地がある。スミスの貧困解決策が市場を介したものに限定されることは，『国富論』における議論の性質上やむを得ない。スミスが教育の役割を重視したことを潜在能力アプローチに関連付けるのは，いささか

強引である。

センの『国富論』解釈と『道徳感情論』解釈には，学説史研究的視点からすると強引な所がある。しかし，スミスの主張の現代的意義を世に伝えたことは，センのかけがえのない貢献である。著名人であるセンの貢献があってか，センの研究分野に限らない幅広い分野でスミスの主張の現代的意義が認められてきた。学説史研究との整合性を担保したうえで，センに倣ってスミスの著作を現代的問題の解決に活かすことが，我々に求められているのではないだろうか。

付録：センの『国富論』解釈の一覧

センの著作における，『国富論』解釈に関連する個所の一覧を，下に示す。この一覧は同解釈についての今後の研究に寄与する可能性がある。以下においては，本論文の参考文献欄に現れる順番にセンの著作が並べられている。文献名の隣に原著の出版年が記載されている。改行後には，ページや節を冒頭に付されたうえで，センの『国富論』解釈に関連する記述の要点が簡潔に記載されている。

- Adam Smith and the contemporary world 2010

2節：貧困と不平等を結び付けて考えたこと

- Uses and Abuses of Adam Smith 2011

2節：市場の限界を，スミスは認識していた
3節262：スミスは貧困や不平等に深く関心を持っていた
5節：スミスは市場の限界を認識し，社会を良くするために他の制度や徳が必要だと考えた

- 『合理的な愚か者』原著1982

索引に該当項目無し

- 『集合的選択と社会的厚生』1970

索引に該当項目無し

- 『自由と経済開発』1999

82スミスは機能のための能力に関心を持っていた。必要の定義。『国富論』を引用。
138スミスは既得権益に批判的であった
139-141スミスは私的な利益の追求が社会的損失を生む可能性を指摘していた（141）。浪費家や山師の話など。
291-　意図せざる結果。『道徳感情論』との関連性。

308「浪費家や山師」にスミスは批判的であった。高利貸しの規制に賛成していた。
311スミスは自己利益の権現ではない
339スミスは教育を重視しており潜在能力の改善可能性に確信を持っていた

- 『貧困の克服』（様々な年代）

索引に該当項目無し

- 『アイデンティティに先行する理性』1998

４人間行動の動機に関してスミスは誤解されている。交換を利己心で説明したことが，拡大解釈されている。

- 『人間の安全保障』（様々な年代）

索引に該当項目無し

- 『議論好きなインド人』2005

索引に該当項目無し

- 『アイデンティティと暴力』2006

42自己利益追求の仮定については，スミスは懐疑的であった

- 『正義のアイデア』2009

275スミスは「経済人」の仮定を主張した人物だと誤解されている
278『国富論』における交換の背後にある動機だけに議論が集中する
367恥をかかないためには。貧困を相対的視点から見る先駆性

- 『合理性と自由（上）（下）』2002

92注35　スミス：「必需品」は社会ごとに異なった方法で定義されなくてはならない
293利己心についてのスミスに対する誤解が，端的に表現されている
360後藤解説文：「自らの思想的源流をアダム・スミスに求めるセン」

- 『インドから考える』2015

175スミスは学校を市場に任せるのが大いに間違っているとした

- 『経済学と倫理学』1987，1988

46スミスが慎慮に加えて共感を重視している

47スミスは自己愛だけで良き社会ができると考えていたわけではない
50『国富論』と飢饉。『国富論』：商人が飢餓を引き起こすのではなく「真の欠乏」から生じる；真の欠乏とは異なる，労働基金の減少も貧困の原因になる。
134「ものごとの現在の状態（the present state of things)」について，スミスは『国富論』で述べている。問題意識に時代性がある
135スミスの真のメッセージ：飢饉を防ぐためには，政府が行動して補充的な所得を生み出し，犠牲者の「権原」を生み出すことである。スミスは純然たる援助よりもより生産指向の政策が望ましいとした

- 『グローバリゼーションと人間の安全保障』（様々な年代）

126『道徳感情論』について

- 『貧困と飢饉』1981

29, 30, 32　スミスは必需品において貧困を相対的に捉えた。貧困の計測は規範的ではなく記述的である
259スミスの命題は，市場を通じた権原を持たない者については，何も述べていない。市場需要を満たす際の効率性に関するものである

- 『不平等の再検討』1992

206注18一般的機能が社会に応じて多様な形態で現れるという基本的論点については，『国富論』まで遡ることができる

- 『福祉と正義』2008

索引に該当項目無し

- 『開発なき成長の限界』2013

52-54『国富論』ではインドが他の地域よりも繁栄している原因を説明するためにそれなりの紙幅が割かれている
176スミスはより多くの国家予算を公教育に費やすべきであると考えていた
349注4　スミスは商業的利害が公共政策に干渉することに警鐘を鳴らしていた

参考文献

外国語文献

- Fleischacker, S. (2011). Adam Smith and cultural relativism. *Erasmus Journal for Philosophy and Economics*, 4(2), 20-41.
- Forman-Barzilai, F. (2010). *Adam Smith and the circles of sympathy: Cosmopolitanism and moral theory*. Cambridge University Press.
- Golemboski, D. (2018). The impartiality of Smith's spectator: The problem of parochialism and the possibility of social critique. *European Journal of Political Theory, 17(2)*, 174-193.
- Rasmussen, D. C. (2014). *The pragmatic enlightenment*. Cambridge University Press.
- Sen, A. (2010). Adam Smith and the contemporary world. *Erasmus Journal for Philosophy and Economics, 3(1)*, 50-67.
- Sen, A. (2011). Uses and Abuses of Adam Smith. *History of Political Economy, 43(2)*, 257-274.
- Smith, A. (1982a). *An inquiry into the nature and causes of the wealth of nations* (Vols. 1-2). (R.H. Campbell, & A.S. Skinner, Eds.). Liberty Fund. (Original work published 1784) 水田洋・杉山忠平訳（2000）『国富論』（１-４）岩波書店。
- Smith, A. (1982b). *The theory of moral sentiments* (D.D. Raphael, & A.L. Macfie, Eds.). Liberty Fund. (Original work published 1790) 水田洋訳（2003）『道徳感情論』（上-下）岩波書店。

日本語文献

- 菅隆彦（2023）「アマルティア・センによる『道徳感情論』解釈の，批判的検討」『静岡英和学院大学紀要』, 21, 45-54。
- センアマルティア著／大庭健・川本隆史訳（1989）『合理的な愚か者』勁草書房。
- センアマルティア著／志田基与師監訳（2000a）『集合的選択と社会的厚生』勁草書房。
- センアマルティア著／石塚雅彦訳（2000b）『自由と経済開発』日本経済新聞出版社。
- センアマルティア著／徳永澄憲・青山治城・松本保美訳（2002a）『経済学の再生』麗沢大学出版会。
- センアマルティア著／大石りら訳（2002b）『貧困の克服』集英社。
- センアマルティア著／細見和志訳（2003）『アイデンティティに先行する理性』関西学院大学出版会。
- センアマルティア著／東郷えりか訳（2006）『人間の安全保障』集英社。
- センアマルティア著／佐藤宏・栗谷利江訳（2008）『議論好きなインド人　対話と異端の歴

史が紡ぐ多文化世界』明石書店。
■ セン・アマルティア著／大門毅監訳（2011a）『アイデンティティと暴力　運命は幻想である』勁草書房。
■ セン・アマルティア著／池本幸生訳（2011b）『正義のアイデア』明石書店。
■ セン・アマルティア著／若松良樹・須賀晃一・後藤玲子監訳（2014）『合理性と自由（上-下）』勁草書房。
■ セン・アマルティア著／山形浩生訳（2016a）『インドから考える　子どもたちが微笑む世界へ』ＮＴＴ出版。
■ セン・アマルティア著／徳永澄憲・松本保美・青山治城訳（2016b）『経済学と倫理学』筑摩書房。（セン（2002a）の新訳）
■ セン・アマルティア著／加藤幹雄訳（2017a）『グローバリゼーションと人間の安全保障』筑摩書房。
■ セン・アマルティア著／黒崎卓・山崎幸治訳（2017b）『貧困と飢饉』岩波書店。
■ セン・アマルティア著／池本幸生・野上裕生・佐藤仁訳（2018）『不平等の再検討』岩波書店。
■ セン・アマルティア＆後藤玲子（2008）『福祉と正義』東京大学出版会。
■ セン・アマルティア＆ドレーズ・ジャン著／湊一樹訳（2015）『開発なき成長の限界-現代インドの貧困・格差・社会的分断』明石書店。

---

* 本論文は，「上廣倫理財団令和四年度研究助成」から助成された研究の成果である。成果として上廣倫理財団に提出された論文に若干の修正を加えたものが，本論文である。

[1] これ以降，『国富論』から引用する際には，WNと記したうえでグラスゴウ版のパラグラフ番号を付し引用元を示す。訳文は水田・杉山訳を利用する。

[2] 本論文の目的はセンの『国富論』解釈の批判的検討であり，同書についての基本的知識を前提としている。よって，厳しい紙幅の都合もあり，同書について詳細な解説を施すことは避ける。

[3] ここでは代表例としてセン（2002a）を挙げたが，センは他の大多数の著作でも同様の主張を展開している。他の著作については参考文献欄を参照せよ。

[4] 潜在能力アプローチの詳細については，セン（2018）を参照せよ。